

追悼 日野原重明先生



日本の医療界を長年にわたり牽引してきた聖路加国際病院名誉院長の日野原重明氏(105歳)が18日、呼吸不全のため逝去した。前日本医学会長の高久史麿氏、東大名誉教授の黒川清氏、インターン時代に教えを受けた慶大名誉教授の猿田享男氏、日本医師会会長の横倉義武氏に故人との思い出を寄せていただいた。

日野原重明(ひのはらしげあき): 山口県山口市出身。1937年京都帝大卒。聖路加国際病院内科医を経て米エモリー大留学。74年聖路加看護大学長、92年聖路加国際病院院長、96年同名誉院長、2014年聖路加国際大名誉理事長。1996年文化功労者、2005年文化勲章

日野原先生のご冥福を祈り、続く者を期待する

東京大学名誉教授、政策研究大学院
名誉教授、日本医療政策機構代表理事
黒川 清

私の在米生活が10年ほど経ち、日本に戻る機会に、聖路加病院に日野原先生を訪ねたことがある。その頃、米国の医学教育はラディカルに変わり始めていた。分子生物学の進歩などによって、基礎・臨床の理解のアプローチが大きく変化していたのだ。さらに、医療に関する訴訟が目立ち、医療費抑制の議論が始まっていた。そのような米国の医療現場の変化と、日本の医学教育などの「変わらなさ」について、日野原先生のご意見を伺おうと思ったのである。先生は毎年のように米国を訪問され、米国の医学教育や医療現場の変化に関する私の問いかけに答えるのに十分な知識を持っておられた。それから、日本に戻るたびに先生のところに立ち寄りたりしていた。

思いもかけないいきさつで、その数年後に、私は帰国することになった。日野原先生と意見を交わす機会も増えた。いまから30余年も前の話である。その時、私がよく口に出したのは、「日本の医学教育改革などについて、私の周りの大学の先生たちは全く理解を示さないし、興味もない。そこで70歳を超える日野原先生に相談に伺うことになる。それも変な話ですよ」。そして、先生は「黒川さん、私の車で次の場所まで送らせるから、遠慮しないで」と言ってくださり、何度か先生のお車を使わせ

ていただいた。

大きなゆったりした先生の車には、先生の座る後部座席前の座席の背中に小さなテーブルがあり、ものが書けるようになっている。横の座席には何冊もの本が置いてある。そこで、それらの本を手に取り、ページをパラパラとめくってみると、明らかに先生は読んでおられるのだ。これには驚き、敬服した。先生はあれだけ何冊もの本を著し、毎年年末年始にはボストンなどを訪問して、米国の医療、医学教育の報告など書いておられた。いつも頭が下がる思いで、先生のところを訪ねた。

80歳を超えられてもお元気、90歳を超えられてもかなりお元気。やはり、私の周りには世界の医学教育の潮流を知らない方たちも多く、なにかあると、「いつも先生のようなご高齢者に意見を伺うのは、ちょっと変ですよ」などとお話したものだ。

その私も、いつの間にか当時の日野原先生に近い年齢になっている。私には出る幕などないような時代にならなければいけないのだが、世界の潮流を身をもって体験し、実感を持って感じ取れる教育者があまりにも少ないのが気になる。グローバル時代のさなか、新興アジア台頭の中でも、日本の大学の存在感が徐々に薄れているのが、私の大きな懸念だ。

合掌。